

2002.7.21

# 伊勢国分寺跡

第28次発掘調査南門跡現地説明会資料

鈴鹿市考古博物館

## 1. これまでの調査

鈴鹿市<sup>くわくふ</sup>国分町字堂跡，西谷，西高木に所在する伊勢国分寺跡は，史跡名勝天然記念物法制定から間もない大正11年10月12日に国の史跡に指定されました。僧寺の遺跡と考えられています。

昭和63年～平成2年の外周の調査により，築地塀<sup>ついで</sup>に囲まれたおよそ180m四方の寺院の範囲<sup>がらみ</sup>(加蓋地)が確認されました。その成果を元に鈴鹿市では，史跡の全域と外周を平成7年から3箇年をかけて公有地化しました。また，史跡の南方に鈴鹿市考古博物館を建設し平成10年10月にオープンさせました。

さて，今回行われている調査は，将来この国分寺跡を史跡公園として整備するため国分寺の<sup>がらみ</sup>加蓋(建物)配置と規模を確認するためのものです。

平成11年度の調査では，史跡の碑が建つ<sup>こうどう</sup>講堂推定地を対象として調査を行いました。その結果，講堂の<sup>きだん</sup>基壇を確認しました。平成12年度の調査では，講堂の調査が継続され基壇の規模が東西32.7m×南北20.6mであることが確認されました。また，<sup>こんどう</sup>金堂の調査では，講堂の南約22mで基壇が確認され創建期の規模が東西30.5m×南北21.9mであることが確認されました。

昨年度からは，史跡 伊勢国分寺跡保存整備事業として国・県の補助事業として規模を拡大して進めています。その成果として，金堂から南に31mの地点で，東西19.5m×南北11.9mの中門の基壇基礎地形が確認されました。また，中門と金堂を結び金堂院を構成する回廊も確認されました。回廊の規模は幅が約7mで，南北50m、東西が68mであったと推定されます。

## 2. 国分寺とはどのような寺だったのでしょ

国分寺は、**聖武**天皇の詔により各国に設置された国営の寺院です。僧寺「**金光明四天王護国之寺**」と尼寺「**法華滅罪之寺**」の二寺からなります。仏典の教義にもとづき国家を平安に治める**鎮護国家**の理念のもとに押し進められた国家的事業でした。天平13(741)年の詔勅が「**国分寺建立の詔**」として知られています。しかし、すでに**天武・持統**天皇の時代から各国に前身的な寺院が置かれていましたし、実際の国分寺建立の出発点は**文**六の**釈迦像**の造立が命じられた天平9(737)年に遡ると考えられています。

国分寺の建設には長い年月と膨大な経費がかかりましたが、それはすべて各国(地方)の負担でした。中央からの様々な財政支援策や督促そして地方豪族の参画などにより、ようやく各地の国分寺が完成を見たのは**聖武**天皇が亡くなり一周忌が営まれた**天智**聖元(757)年頃ではなかったかと言われています。

伊勢国分寺の実態についての文献は極めて限られています。**宝**6(775)年の異常風雨により伊勢・尾張・美濃の国分寺並びに諸寺の塔が壊れたという記事と、**大同**4(809)年の志摩国分二寺の僧尼を伊勢国分寺に安置したという記事の2件のみです。

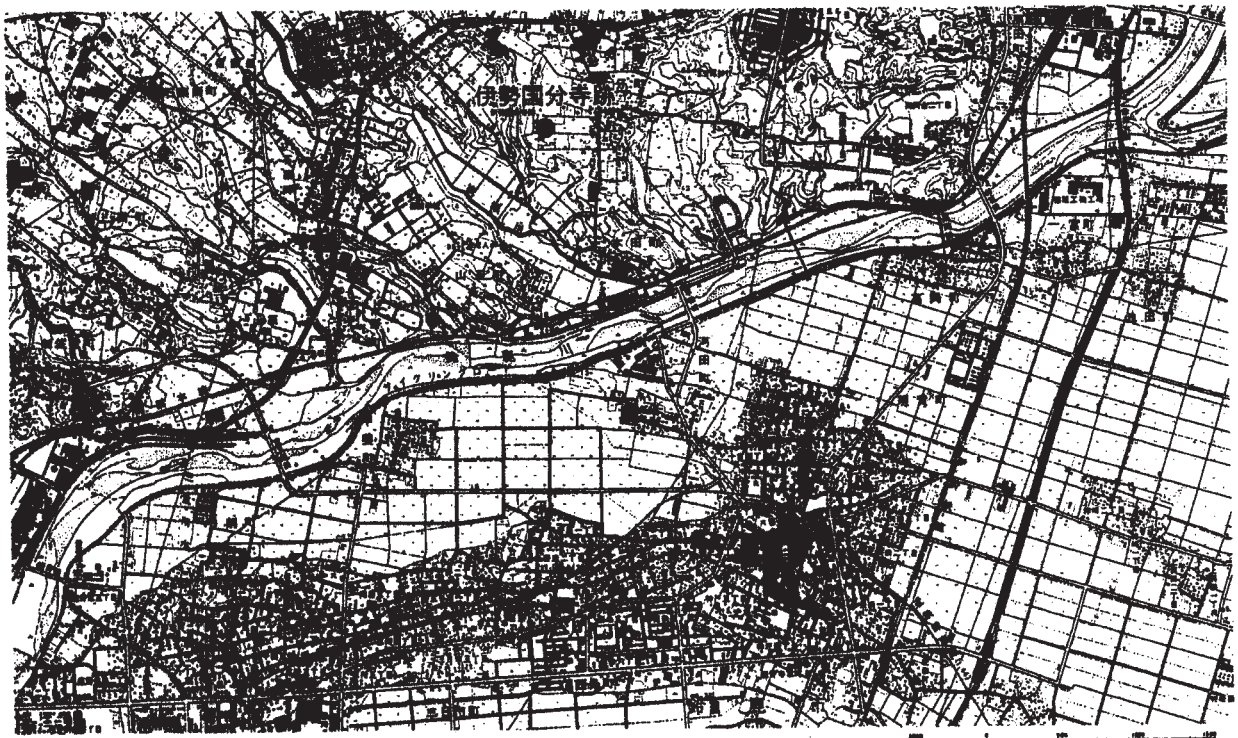
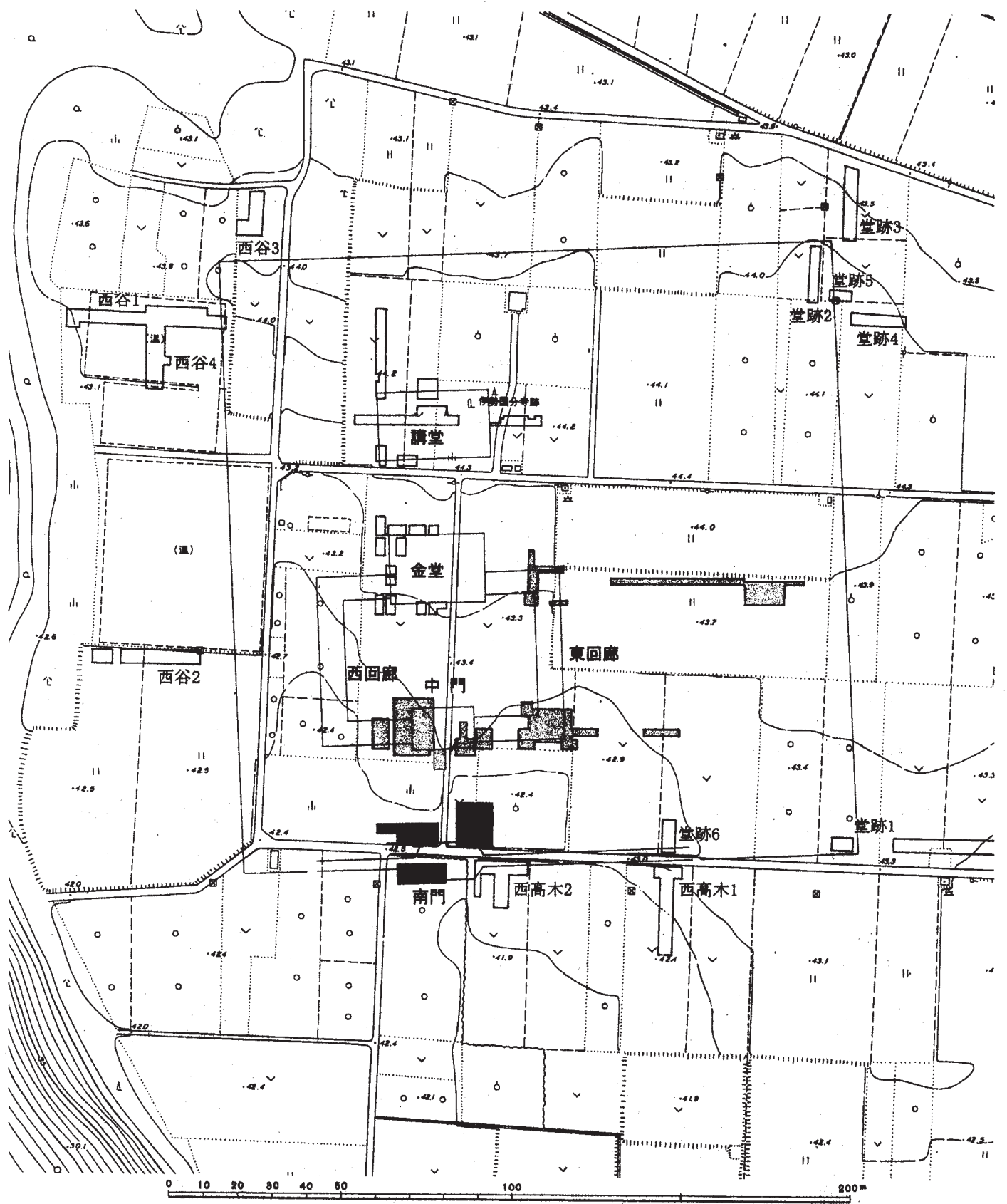


Fig. 1 伊勢国分寺跡の位置(1 : 50,000)



発掘調査区位置図(1 : 1,600)

黒塗り 28次調査区

網掛け 25次調査区

### 3. 今回の調査で明らかになったこと

南門推定地の調査はこれまでも2回行われています。1回目の調査は平成2年の外周調査の際に南辺築地SA-Sとそれに付随して南側に張り出すテラス状の遺構SX01が検出され、南門基壇の南東端ではないかと推定されました。2回目の調査は、平成9年に博物館のガイダンス広場造成に際して行われた調査で、道路の側溝状の溝が確認され南門に取り付く道路の可能性が推定され、また東西に並ぶ柵列SA-Xも検出され足場穴かとの推定もなされていました。このように南門のおおよその位置の見当はついていましたが、整備に向けて正確な規模を知るために調査を行うことになりました。調査は昨年度の2月7日～3月12日にかけて25-2次調査として一部の掘削と遺構検出を行い、今年度、新たに5月9日から28次調査として調査区の追加拡張と記録を行っています。

#### 南門(SB0140)

国分寺が立地する台地は緩やかに南に向かって傾斜しており、南側の遺構ほど自然の浸食と後世の耕作により削平され遺構の残りが悪くなっています。一番南にあたる南門では中門でかろうじて確認された基壇の基礎地形（地下の地盤改良）の痕跡さえもほとんど失われており、外周に掘られた溝SD0142・0143・0144によってかろうじて規模が推定できるような状態でした。それでも北西角にはわずかに基礎地形の痕跡と見られる黄色土と褐色土が混じった層がみられ、また足場穴の可能性のある2個の柱穴が2.4m間隔をおいて見つかっています。西辺にも、大きな柱穴2個が見つっていますが、足場穴としては大きすぎるため性格は不明です。

特徴的な点として、溝から推定される基壇の平面形が長方形ではなく、各々の角を切り落としたような扁平な八角形状をしていることです。現状で言える基壇の規模は東西が17.6m、南北が11.2mとなります。

北外周溝（SD0142・0143）基壇の外周を巡る溝です。幅は1.5～2.5mありますが、南門の中心付近の7mの間は1m弱と幅が狭くなっています。深さは検出面から0.5m以上あり、本来は1mを超えるかなり深い溝です。底部近くからも瓦が多数出土していますので、築造時ではなく改修時に掘られ、埋め戻されたようです。

南外周溝（SD0144）西側は築地外周溝SD0145に切られています。調査区外に広がるために幅、深さは不明です。南門正面では切れており、陸橋状をなしています。切れた位置が、北外周溝の幅の狭まる部分と対応するためこの間7mが通路として利用されていたとも考えられます。

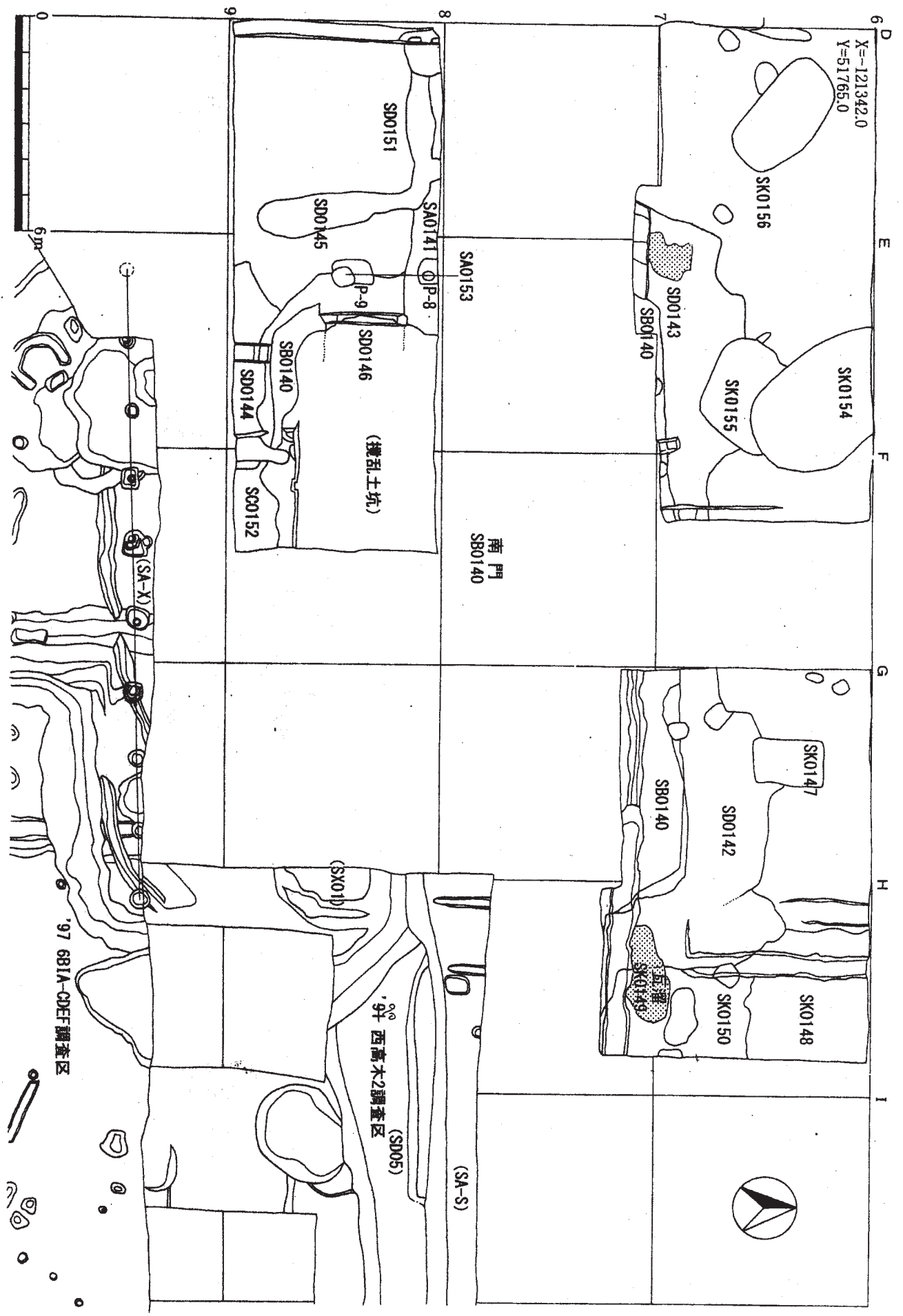
西築地及び外周溝（SA0141・SD0145）築地は現在の道路とほぼ重複しているため南辺のみしか検出されていませんが、南門の推定中心軸で折り返すと基底幅3mと復元できます。外周溝は幅が5m以上、深さは0.6mあります。平成3年調査次の東側で検出されたSD05と異なり底面が平坦で、広いことから改修時の廃棄土坑として利用されていた可能性があります。

ところ  
土坑（SK0147） 南北2m、東西1.3mの方形の土坑です。外周溝を切って掘られています。

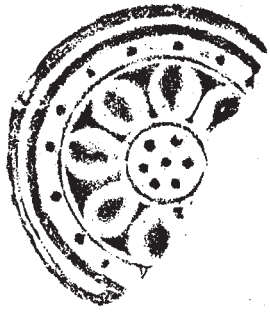
廃棄土坑（SK0148・SK0154～0156）南門の周囲には、改修時、廃絶時そして後世の耕作の際に邪魔となった瓦を廃棄するために掘られた大小の土坑が点在しています。最大の土坑SK0148からは鬼瓦の破片も出土しました。

## 出土遺物

遺物の多くは攪乱層や後世の廃棄土坑からの出土で、大部分が平瓦と丸瓦の破片です。軒丸瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦ⅡA03型式が比較的多くおそらく創建時のものでしょう。ⅡA04型式も少数出土しています。軒平瓦は均整唐草文軒平瓦ⅡB01型式が多くⅡB02型式も出土しています。また、鬼瓦の一部が出土しています。



南門村近遺構配置圖(1:150)



IIA03



IIA03



IIA04



II B 01



II B 02



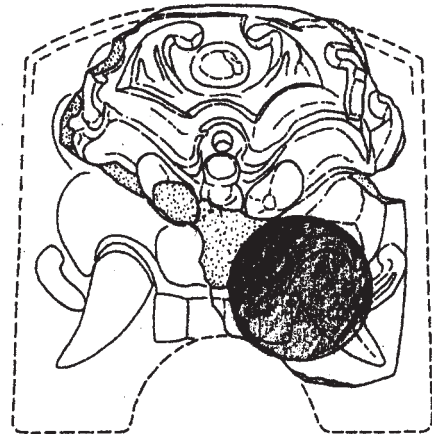
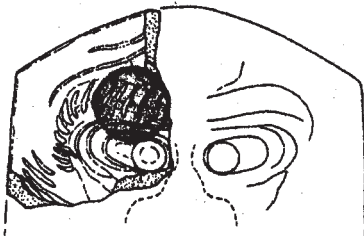
II B ?



鬼瓦 (眉毛)



鬼瓦 (齒)





## 4. まとめ

今回の調査の知見をまとめると以下ようになります。

- ①南門の正確な位置と規模を確認しましたが、基壇は残りが悪く基礎地形まで削平されていました。
- ②南門基壇の規模は南北11.2m(約38尺)×東西17.6m(約60尺)とみられます。
- ③検出された外周溝は改築時に掘られたものとみられますが、長方形の角を切り落としたような扁平な八角形状をなします。このような例は他には見られません。どのような工法的な理由があるのかは不明です。
- ④中門基壇と南門基壇の芯芯間の距離は38m(約126尺)です。
- ⑤門を通過して中門にいたる幅7m(約24尺)の通路が存在したことが推定できます。
- ⑥平成9年の調査の際に確認された東西の柵列は、ほぼ南門の幅と等しく関連が高いとみられます。しかし、南門の南辺から4mほど離れており足場穴とは考えられませんが、門の建設や改修時に直接内部が見渡せないようにする目隠し塀のようなものではなかったかとみられます。

なお、塔跡については金堂の東方で現在も調査中ですが、まだ基壇は確認されていません

〒513-0013

鈴鹿市国分町224

鈴鹿市考古博物館

TEL0593-74-1994